

週日の説教

金 大烈 神父 2011年3月10日(木)

《置かれている立場と、心の状態》

主の平和

四旬節に入ってこれから読まれる福音の内容は、今日(ルカ 9・22-25)のように厳しい内容になると思います。

さあ皆様、ドイツで有名な詩人「ハイネ」をご存知ですよ。そのハイネは“愛”をテーマに詩を書いたと言われていました。又、特に彼が好んで使っていたものには“お月さま”もあります。ですから彼は、月を見ながら自分の愛する人を思い浮かべて、詩を書いた訳です。そのハイネに関する逸話を紹介させていただきます。

彼がある日、5~6人の仲間達と一緒に、森に狩りに出かけたそうです。森の中程まで行って、彼だけ仲間から離れてしまいました。道を探そうとしても森があまりにも深く道に迷ってしまいました。森をさまようことが三日間続いたそうです。夜になると、訳の分からない獣のような鳴き声が聞こえてきて、自分が襲われるかも知れない恐怖に怯え、空腹でどうしようもない状態に陥ります。その三日目に、こんな気力では「やっぱり私は獣に食われてしまう」どうしたらいいかと思って、出した結論は、木の上に登ることでした。残っている力を振り絞って一生懸命に登りました。登り終えて、枝と枝の間から洩れて来た光を見つけます。よく見える位置に移って見上げてみると、彼の目に入ったのは、それは綺麗な満月のお月様でした。その時、彼がどんな気持ちになったか聞いたことがありますか？「ああ、今日はこのお月様がパンのように見える」「パンの大きな固まりに見える」。もう、彼には美しい月ではなく、恋とか愛とかは全く思い浮かばなくて、ただ彼は疲れと餓えによって、その月が「パンに過ぎない、パンのように見えた」。そのような経験を木の上でしたという訳です。幸いに翌日には仲間によって救われたということです。

その人が書いた文章が面白いです。私は今まで月を見て、思い浮かぶ色々な愛について語って来た。しかし、自分が困難な状態に陥った時に、自分の目に入ったのはただパンだけ、パンの固まりにしか見えなかった。実物そのものよりも、“私達は置かれている立場から見、心が感じているものを見ながら生きているのではないか。”という文章です。結局、私達が見ている全てのものは、やはり心で見えるものではないかと思います。

さあ、私達は仕方なしに、十字架を背負わなくてはなりません。その十字架を重荷に感じるのか、意味深く、何かを乗り越えるための宝物として感じられるのか、それは自分の今の心の状態を表しているのではないのでしょうか。

今日、イエス様がおっしゃった『自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。』(ルカ 9・23)と言う御言葉に、私達が「はい」と言いながら気持ち良く、そして希望を持ち、ついて行こうとすれば、

今の私達の心の状態が何よりも大事なこととして必要だと思います。私達が信仰的に満ち溢れていたから、「その十字架がなければ、私の人生は意味がありません。」という告白が出来るのではないのでしょうか。しかし、誰かと比べて軽い十字架にも関わらず「私になぜこんな試練を下さるのでしょうか。」と泣き声を出す人々ならば、その人々の心の状態が、今それを負うには疲れ果てていることを表しているのではないのでしょうか。

結局、私達がこれを受け取らなければならない、負わなければならない十字架なら、それを負いやすくするためにも、私達の心をいつも整えることが必要だと思います。私達の目、目の中に入るそのものを見るのは、私達の心であることをもう一度考えてみましょう。

人との関わりも同じです。その人が奇麗に見えるか汚く見えるか、嫌だと思ってしまうか、それらもみな私達の心がある人を受け取れる器になっているか、そうではないかの問題です。色々な痛みがあっても、その原因を、まず自分の心の内に探す知恵が必要ではないかと思います。相手は変わらなくても、私の受け取り方が変われるように、もっといい方面に自分の心を導いて行こうとするその働きも必要ではないかと思ってみました。

ありがとうございました。